

To the memory of Dr. Shozo Kotani
Yutaka Mizushima*



小谷尚三先生を偲ぶ

水 島 裕 *

小谷先生は、学会ではかなり鋭い発言をされていたが、私に対してはごく初期の一時期を除き、いつもあの温厚な笑顔で接していただき、色々なことを教えていただいた。ここ数年お会いしていないのでどうなされたかと思っていたが、この度ご逝去の報に突然接し、本当に残念でならない。ここ10年くらいは学会にもあまりお見えになっていないので、若い学会員の方はご存じないかもしれないが、それまでの会員の方々は私と同じような印象をきっと持たれているに違いない。大正11年のお生まれなので、5月2日のご逝去となれば、恐らく81年の男性平均寿命よりかなり長い立派な人生を送られたと考える以外にない。

日本炎症・再生医学会との関係であるが、小谷先生は評議員を昭和56年からずっと務められ、平成2年4月から名誉会員となられた。つまり学会設立早々から評議員としてご活躍いただいたわけであり、昭和59年4月から2期監事を務められ、本学会に多大の功績を残された。

小谷先生は昭和20年大阪帝国大学医学部の卒業であり、その後公衆衛生学の助教授、奈良県立医大細菌学教授、大阪大学歯学部教授を歴任され、昭和54年から大阪大学歯学部長を2期4年務められ、61年からは大阪大学名誉教授となられた。専門は細菌・細胞成分に関する免疫学などを中心に、微生物学と免疫学の両領域およびその接点で数々の優れた業績をあげられた。小谷先生の優れた業績に対し、昭和55年に第1回ベーリング北里が贈られ、その他、日本細菌学会より浅川賞などが授与されており、また学術審議会専門委員を2度にわたってなさるなど、国の行政にもしばしば関与された。

私がなぜ小谷先生と接点があるかというと、私は東大物療内科時代からペーチェット病の研究を行い、厚生省の班会議も2期班長を務めさせていただいた。この間、ペーチェット病の好中球過運動、コルヒチン療法などの研究に加え、とくに班長になってからは連鎖球菌などの細菌抗原によるペーチェット病の発症・悪化の研究を進め、現在も英国のレーナー教授らと共同研究を続けている状態である。まさに小谷先生がその方面の第一人者というか日本一の先生であり、学会・研究会でお会いするたびに学問の師匠としていろいろお伺いした。その度にニコニコとお話くださり、また有益な示唆を与えてくださったのもつい最近のように思い出されてならない。ペーチェット病研究に必要な菌体成分なども小谷先生のお弟子さんからいただいた。

恐らく私以外の会員の方々の中にも小谷先生のご見識を大いに活用され、研究なさった方も多数いるのではないかと思います。学会全体として、また私個人として本当にお世話になった先生である。この追悼文を借りて最後のお礼を申し上げて筆をおくことにする。

* 東京慈恵会医科大学 DDS 研究所長、日本炎症・再生医学会名誉理事長